

東京都美術館 ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 482

100周年記念号

start

輝くあの人とartの素敵な出発点

Interview

LiLiCo



スウェーデン出身の映画コメンテーター、**LiLiCo**さん。多方面で活躍し、常にハッピーオーラで人々を魅了しています。アートは子どもの頃から身近にあり、喜びや刺激を与えてくれる存在だったとか。今回はその魅力についてうかがいました。

Film critic LiLiCo is originally from Sweden. Active in multiple fields, she continually radiates a happy aura. Having had contact with art from a young age, she considers it a source of joy and stimulation. We asked her about art's appeal for her.

アートがもたらす喜び —豊かな色彩が脳への刺激に—

祖国スウェーデンには、美術館や博物館が数多くあり、小さな頃から頻繁に訪れていました。また、ストックホルムの街並みはカラフルで、随所に銅像などが置かれ、地下鉄の各駅にはイラストやオブジェが施されており、“世界一長い美術館”とも言われているんですよ。そんな環境で育ち、母親も絵を描く人でしたから、物心ついた時からアートは当たり前のように身近にありました。

もちろん幼い頃は「きれい!」「何これ?」といった程度に眺めていただけです。ただ、豊かな色彩が脳を刺激してくれることに早くから気づき、さまざまなアートから喜びやときめき、インスピレーションを与えてもらっていました。私の経験からも、幼少期から美術館などへ足を運び、アートにふれることは、とても大切だと思っています。

心に響く瞬間が、私のアートになる

私にとってアートとは、理屈ではなく心に響いたり、メッセージを感じたりした瞬間に生まれるもの。直感で「これ、いいな。好き!」から始まることも多いですね。特に最近ハマっているのが、「渦を11年描いてる人」と名乗るアーティストの作品。文字通り渦を描き続けている方で、その作品にひと目惚れし、即購入しました。

好きなアートは自宅のあちこちに飾っていますが、このオブジェが緑だから横に置くのはこの絵、といった具合に、作品同士や家具との調和も考えて配置しています。

「アートは高くて手が出せない」と言う人もいますが、何億円もするアートを買うことは無理でも、カレンダーやポストカードなら気軽に入手できますよね。そうしたものを家に飾るだけでも癒やされ、脳が刺激されます。自分が素敵だと思うもの



スウェーデンで育まれたアート体験が心を豊かに…
大好きなアートに囲まれて人生をエンジョイしています!
Deeply enriched by art experiences while growing up in Sweden...
Enjoying a life surrounded by the art I love!

にふれながら暮らすこと、それが私にとってアートの魅力であり、人生に必要な不可欠なものです!

アーティストへのリスペクトが根底に

美術館などに行くときの格好は、長時間歩けるようにスニーカー、そして落ち着いた服装がマストです。私の根底にはアーティストに対するリスペクトがあり、華美すぎる服やヨレヨレのTシャツではアートに失礼になりますから。

作品に向き合うときは、最初はタイトルも解説も読まず、頭をからっぽにしてじっとみつめます。湧き上がる感情に身を委ね、心を揺さぶられたりメッセージを感じたりした段階で初めてタイトルを見たり解説に目を通すようにしています。結果、自分の解釈と全然違い、「どうしてこのタイトル!?’と理解できない時もあるのですが、理解できないこと自体を楽しんじゃいますね。

皆さんには同じ絵でも繰り返しみることをお勧めしたい。たとえば子どもの頃は全く感動しなかった映画を大人になって観たら深く心に響いた、などの体験はありませんか? アートでも同じことが起こります。「以前みたとき暗い印象だった」などの理由でスルーするのは、もったいない! 歳を重ねて再び向き合えば新たな感情が湧き上がるかもしれません。それは感性が磨かれた証拠。ぜひ何度も作品と対話し、自分自身の変化も感じてくださいね。

スウェーデン絵画の魅力を堪能してほしい

記念すべき東京都美術館開館100周年の特別展にスウェーデン絵画が選ばれたとあって、感激です! あのスウェーデン国立美術館から名作の数々が来日するなんて、超貴重なこと。私も何度も訪れ、そのたびに感動を新たにしていました。カール・ラーションの作品もみられると知り、楽しみで仕方ありません。パスポートの裏表紙にも使われたことがある、国民的画家なん

LiLiCo(りりこ)

1970年生まれ、スウェーデン・ストックホルム出身。日本人の母とスウェーデン人の父をもつ。1988年に来日、翌年より芸能活動をスタートし、TBS「王様のブランチ」で映画コメンテーターとしてレギュラー出演するほか、さまざまな媒体で映画俳優へのインタビューを行う。毎週金曜日にはJ-WAVEの生放送ラジオ「ALL GOOD FRIDAY」でナビゲーターを務める。女優、ナレーター、声優、エッセイ執筆、旅行のプロデュース業から北欧雑貨のセレクトショップ経営まで、幅広く活躍。著書に『遅咲きも晩婚もHappyに変えて 北欧マインドの暮らし』（講談社）など。



ですよ！

そして、今回の展覧会をきっかけに、スウェーデンという国にも関心をもっていただけたらなお嬉しいです。映画コメンテーターとしては、私の生涯ナンバーワン映画である『歓びを歌にのせて』というスウェーデン映画をお勧めしたい。一人の指揮者の人生再生物語で、歌も素晴ら

As someone born and raised in Sweden, I have always felt close to art. Experiences enjoyed just naturally in daily life, such as art museums, colorful townscapes, and art on subway walls, taught me that colors stimulate the brain and give the heart richness.

For me, art is felt by the heart rather than reason. Art is something born the moment I feel its message. When displaying art I like in my home, I make sure to arrange it in harmony with the interior. At an art museum, I first view the artwork with a clear mind and then read the title and commentary. I also encourage everyone to see an artwork many times, because the same work will offer new discoveries as you accumulate life experiences.

I'm really excited about the Tokyo Metropolitan Art Museum's 100th Anniversary Exhibition, as it will feature Swedish paintings, and I'll be able to see masterpieces from the Nationalmuseum! It will be a precious chance to view the painting by beloved Swedish painter Carl Larsson, displayed inside the back cover of the Swedish passport. I hope people who have never seen Swedish paintings will also attend the exhibition and feel their deep charm. I of course will attend without fail.

しく、人生は自分のためにあることを教えてくれる映画です。

これまでスウェーデン絵画を目にしたことがない方も、ぜひその魅力を堪能してください。私ももちろん足を運びます！



東京都美術館開館
100周年記念
スウェーデン絵画
北欧の光、
日常のかがやき

100th Anniversary of
the Tokyo Metropolitan
Art Museum
Masters of Swedish
Painting from
Nationalmuseum,
Stockholm

会期

2026年1月27日(火)～4月12日(日)

展覧会公式サイト

<https://swedishpainting2026.jp>

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

2026年1月27日(火)より特別展「スウェーデン絵画 北欧の光、日常のかがやき」を開催いたします。近年注目を集める北欧美術。今回は、担当者がスウェーデンで感じた初夏の空の光と出品作品について紹介します。

The special exhibition "Masters of Swedish Painting from Nationalmuseum, Stockholm" will be held from January 27 (Tue) 2026. Nordic Art has received increasing international attention in recent years. This time, the exhibition's curator discusses the early summer Northern Light she experienced in Sweden and works that will be featured.



ニルス・クルーゲル
《夜の訪れ》
1904年、
油彩／カンヴァス、
スウェーデン
国立美術館蔵
Nils Kruger, *Nightfall*,
1904, oil on canvas,
Nationalmuseum,
Stockholm

が昇り、午後10時ごろに日の入りを迎えます。夕暮れ時には、遠くの地平線に夕陽が長く輝き続け、空の色はあいまいな光をのこしたままゆっくりと静かに変化していきます。そして陽が沈んだ後も、完全に闇に包まれることなく、青い光で満たされる空が特に印象的でした。

19世紀後半のスウェーデンの画家たちは、この国の豊かな自然とそこを照らす光に「スウェーデンらしさ」を見出しました。この北欧の夏の夜に見られる淡く青い光を、きっと彼らは意識したのではないのでしょうか。本展に出品されるニルス・クルーゲルの《夜の訪れ》でも、短いストロークによって表現された夜の青い光が、空を満たすだけでなく、地上にも降り注ぎ、草を食む馬たちのいる風景に壮大で幻想的な雰囲気を与えています。

本展は、スウェーデンらしい芸術の創造をめざした19世紀後半の同国の絵画を体系的に紹介する、日本で初めての展覧会となります。スウェーデン絵画の世界との出会いをどうぞお楽しみください。

(東京都美術館 学芸員 中江花菜)

Late 19th century Swedish painters discovered "Swedish identity" in the nation's abundant nature and light illuminating it. Summer days are long in Stockholm. As dusk falls, the sun lingers long over the distant horizon, and the sky retains a vague residual light while slowly and quietly changing color. After the sun sets, instead of turning to darkness, the sky is filled with blue light as seen in Nils Kruger's paintings. We invite you to visit and experience the Northern Light in the exhibition venue.

(NAKAE Kana, Curator)

夏のストックホルムでは、午前3時過ぎに日

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。今回は、2026年まで毎年夏に公募展示室で開催する「アート・コミュニケーション事業を体験する」についてご紹介します。

The Museum offers Art and Communication projects designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks. This time, we introduce the "Welcome to Art Communication Programs" exhibition scheduled to be held every summer until 2026 in the Citizen's Galleries.

アート・コミュニケーション事業を 体験する 2025

みること、つくること、つながること 「Museum Start あいうえの」 12年と現在地

Welcome to Art Communication Programs – Showcase 2025
To look and discover, create and explore, connect and collaborate
Museum Start i-Ueno's 12 years—Where we are now

2012年に始まったアート・コミュニケーション事業（以下、AC事業）の歩みや実践を、体験を通じて紹介することで、AC事業をより多くの方に知っていただく機会としています。当館のロビー階第3公募展示室を会場に、作品を介したコミュニケーションや参加型プログラムが楽しめる展覧会です。

To enable more people to know about the Art Communication Programs ("AC Programs") launched in 2012, the Museum holds a "Welcome to Art Communication Programs" exhibition to let visitors experience the programs, learn their history, and know what actually goes on in them. Held in Citizen's Gallery 3 on the lobby floor, the exhibition invites visitors to enjoy communicating through artworks and experiencing participatory programs.

「アート・コミュニケーション事業」とは？

What are the "Art Communication Programs"?

2012年の当館のリニューアルを機に新たなミッションを具現化する事業の1つとして始動しました。美術館が芸術や文化財を研究し展示するだけでなく、人と作品、人と人をつなげ、創造的な時間が生まれる場所であるように、さまざまな取り組みを行っています。

The Tokyo Metropolitan Art Museum adopted a new mission on the occasion of its 2012 Grand Reopening. At that time, the Art Communications Programs were launched as an important initiative to realize the mission's goals. The Museum is making various efforts to ensure that it is a place not only to research and exhibit art and cultural properties but also one where people can spend time creatively and find connection with artworks as well as with other people.

アート・コミュニケーション事業 を体験型の展覧会で紹介

A hands-on exhibition introducing the Art Communication Programs

アート・コミュニケーション事業では、美術館の文化資源を介して対話を育み、多様な人々が自分らしく社会参加できる場づくりをめざしています。本事業をより多くの人に発信する機会として、2023年から夏の特別企画「アート・コミュニケーション事業を体験する」を実施しています。ロビー階の第3公募展示室を会場に、展覧会形式で当事業の活動について紹介する試みです。展示室では、とびらプロジェクトで活動するアート・コミュニケータ（愛称：とびラー）と、3年間の任期を満了したとびラーが来場者を迎えます。

3年目の開催となる本年は、「みること、つくること、つながること『Museum Start あいうえの』12年と現在地」をテーマとし、ミュージアムで創発される協働的な学びや、文化への関心から始まる社会参加について考える機会としました。

展覧会の前半では、他者や文化財との関わりを大切に制作を続ける3組の作家を紹介しました。

森友紀恵さんの日本画は、上野公園の不忍池や、動植物を細かに観察して制作されたもので、さまざまな発見を楽しみながら鑑賞で

きる作品です。



三輪途道さんの彫刻は、全盲になってから手の感覚のみで制作した作品。みえない・みえにくい方も、みえる方も、ふれて鑑賞することができます。



がかのか族（幸田千依と加茂昂とその息子）は、家族の生活と制作をつなげ、会場を訪れるさまざまな人と関わりながら、展示室での「公開生活」を行いました。



後半では、上野公園に集まる9つの文化施設が連携して取り組む「Museum Start あいうえの」の12年の活動アーカイブを展示しました。写真やワークシート、映像などを通して、多

様な子どもたちが作品や文化財と出会い、学びや交流を深めてきた様子を公開しました。

10日間を通じて、約3600人に来場いただき、とびラーがのべ141人、任期満了したとびラーがのべ117人関わりました。



2026年度は、7月31日（金）～8月10日（月）の期間で開催予定です。東京都美術館が100周年を迎える年、アート・コミュニケーション事業についてご紹介しながら、美術館の社会的役割について来場者の皆さんと一緒に考える機会となれば幸いです。

（東京都美術館 学芸員 峰岸優香）

詳細はこちら

「アート・コミュニケーション事業を体験する」特設サイト

<https://tobira-project.info/ac-ten/>

Details here:
Special site: "Welcome to Art Communications Programs"



Through our Art Communication Programs, we seek to foster dialogue via the Museum's cultural resources and create situations where diverse people can all participate in society in their own way. To widely introduce the Art Communications Programs, we have been holding a special summer project, "Welcome to Art Communications Programs" since 2023. The theme in this, the event's third year, was "To Look and Explore, Create and Discover, Collaborate and Connect: Museum Start i-Ueno's 12 Years—Where we are now." We made it an opportunity to think about the collaborative learning taking place in a museum and the social participation motivated by an interest in culture. Many people visited the event venue. Accompanied by art communicators, they talked while viewing artworks and enjoyed touchable works and tactile drawings. In fiscal 2026, the event is scheduled to be held from July 31 (Friday) to August 10 (Monday). In the Tokyo Metropolitan Art Museum's 100th anniversary year, we hope that it will be an opportunity to introduce the Art Communication Programs and join visitors in thinking about the social role of a museum. (MINEGISHI Yūka, Curator, Learning and Public Projects)

うえの

う

ときどき谷根千

株式会社マツヤ服飾刺繍 代表取締役

野村雅俊さん

NOMURA Masatoshi
(president of MATSUYA Embroidery Co.Ltd)

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界隈。今回は老舗の刺繍加工専門店、「マツヤ服飾刺繍」の店主が町の魅力を紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the mood of Tokyo's old downtown quarter. This time, the proprietor of the time-honored embroidery manufacturing shop, MATSUYA Embroidery Co.Ltd, introduces us to his district's charms.

木刺の工房兼展示室にて。「3代目の祖父から教わり、自分は7歳から刺繍針を持っていました。家業を継ぐのは自然な流れで、特に気負いも重圧もありませんでしたね」と笑うのは、5代目の野村雅俊さん。木刺は国内外で大人気で、展示室の作品をほぼ全て購入していった海外旅行者もいるという。

At the wood embroidery studio/gallery. "Taught by my 3rd-generation proprietor grandfather, I was using an embroidery needle at the age of seven. Taking over the family business was a natural step for me. No pressure and no forcing myself," 5th-generation proprietor NOMURA Masatoshi says with a laugh. Their embroidered wood is greatly popular in Japan and overseas. One overseas tourist bought almost all the products in the gallery, he recalls.

150年の伝統と技を守りつつ、たゆまぬ進化を… ～上野から始まる新しい刺繍の世界～

Unflagging innovation while preserving 150 years of tradition and skills—A new embroidery world born in Ueno

マツヤ服飾刺繍は創業150年を迎えた総合刺繍メーカーで、私はその5代目です。当店では一針一針丁寧に繡い上げる手刺繍の技術を守りつつ、戦後はミシンを使った機械刺繍にも幅を広げていきました。主に扱うのは、東京都の伝統工芸品にも指定されている「江戸刺繍」。多彩な色使いと華やかなデザインが特徴で、古くから神社仏閣の調度品や着物の縫紋、帯の柄入れなどを手がけてきました。現在では、力士の化粧まわしからオリジナルグッズへの刺繍加工まで、多岐にわたるニーズにお応えしています。

転機が訪れたのは、コロナ禍で受注が減ったときです。数年前からあたため、かつて祖父

や父も挑戦していた「木に刺繍」という技術を完成させたいと考えました。奥多摩に通ってヒノキやスギなど、樹種ごとの特性を木工職人たちから学び、試行錯誤を繰り返した結果、木のぬくもりと糸の立体感が調和した、表情豊かな作品が出来上がりました。当初は手広く展開するつもりはありませんでしたが、あるお客様から「展示会で見て素敵だったから母に贈りたい」と注文が入り、お名前と模様を入れて制作したところ、お母様がたいそう気に入ってくださったとお手紙をいただいたのです。「こんなに喜んでくださるのなら…」とその方の言葉に背中を押される形で本格的に取り組むようになりました。

2022年には「木刺^{きざし}」として特許を取得し、専用の工房兼展示室も新設。ただ、量産はできず、独自の技法でしか作ることができません。「生地に繡うもの」という刺繍の固定観念を覆し、その可能性を広げるためにも、いずれ木刺の技術は公開するつもりです。

長くこの地で家業を営んでいると、うれしい出会いもあります。先代、先々代の、何十年も前の作品を持参され、「孫の名前で作り直して」「この模様だけ変えてほしい」というご依頼をいただくことが。よくこんな古いものを大切にしてくださっていたと感激するとともに、「祖父は〇〇を入れたんだ。じゃあ私は△△を入れよう」など、今は亡き先代と自分がコラボしているような感覚で、感慨深いものがあります。

東京都美術館で開催する「刺繍—針がすぐいさす世界」展には、もちろん足を運ぶ予定です。想像力豊かで独創性に富んだ作家の感性にふれ、刺激を受けられるのが楽しみです。

私は生まれも育ちも上野。このまちの自然の美しさと人々の絆は昔から変わらず、祭りともなると、驚くほどの結束力を発揮します(笑)。住人同士が声をかけ合い、見守り合う、そんなあたたかなまちです。

皆さんにおすすめしたいのは、私の日課でもある散歩コース。不忍池^{べん}の辯天堂から五條天

MATSUYA Embroidery Co.Ltd is a comprehensive embroidery manufacturer dating back over 150 years, dealing mainly in Edo embroidery. Since long ago, we have produced furnishings and kimono for shrines and temples. In recent years, we cater to diverse needs ranging from ceremonial aprons to embroidery for custom merchandise.

When orders declined under the COVID-19 pandemic, we perfected a technique of embroidering letters and pictures on wood. By learning the characteristics of different tree species from wood artisans and working trial and error, we could arrive at products that harmonize the warmth of wood with thread's three-dimensionality. Thanks to a good response from customers, we set to work in earnest and obtained a patent in 2022.

Because we are a shop doing business in this area for generations, people bring us products made our predecessors,

神社、そして上野公園を巡ります。特に朝の上野公園は葉っぱの香りが五感を心地よく刺激し、四季の移ろいも感じられ、リラックスできます。自然の中に身を置き、頭をからっぽにしていると、新たなアイデアが浮かんでくることも。さらに、東京都美術館の脇道など、メインストリートから外れると人通りが少なく、ゆったりとした空気が流れていて、静かに過ごせます。そんな上野のまちに見守られながら、これからも私は刺繍の奥深さを追い求めていきます。



木刺は東京都檜原村産のヒノキを使用。刺繍の質感と木の調和が美しい

Our embroidered wood uses Japanese cypress grown in Tokyo's Hinohara village. The wood harmonizes beautifully with embroidery's characteristics.



機械刺繍では専用の刺繍ミシンを使い、安定した仕上がりと多彩な刺繍表現を実現

A specialized embroidery machine enables colorful embroidery consistent in finish.

asking us to "remake it with my grandchild's name." This moves us deeply, for we feel as if collaborating with our predecessors. The current exhibition at the Tokyo Metropolitan Art Museum, "Ueno Artist Project 2025: Embroidery—Expression of Life from the Rhythm of a Needle," lets us get inspired by richly imaginative, highly original artists, so I really look forward to attending.

As someone born and raised in Ueno, I want to recommend the walking course from Benten-do Temple at Shinobazu Pond to Gojoten Shrine and around Ueno Park. By leaving the main street and taking side streets such as the one by Tokyo Metropolitan Art Museum, you can enjoy a quiet walk with few people around.

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約260団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。
美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックでご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is "the home of the public entry exhibition."
Each year, some 260 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works
by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

刺繍家・平野利太郎としたろうに再注目
(1904~1994)

A fresh look at embroidery artist HIRANO Toshitaro (1904-1994)



平野利太郎《サボテン》(部分) 1955年、町田市立博物館蔵
HIRANO Toshitaro, Cactus (detail), 1955, Machida City Museum

2017年から毎年秋に開催している「上野アーティストプロジェクト」は、開館当初から美術などのさまざまな団体(公募団体)による公募型展覧会(公募団体展・公募展)開催の場であり続けてきた、当館の歴史の継承と未来への発展を図るため、公募団体に関わる作家を積極的に紹介する展覧会シリーズです。

本年は、11月18日(火)より、ギャラリーA・Cを会場に、上野アーティストプロジェクト2025「刺繍—針がすくい出す世界」を開催します。布などに針を刺し糸を縫いつけていく「刺繍」と呼ばれる手わざによる造形に注目し、5名のつくり手の作品を展示していますが、ここではその中から、特に公募団体との関わりが深い、大正～昭和期に活躍

した刺繍家・平野利太郎をご紹介します。

1904(明治37)年に近世から続く刺繍職人の家に生まれた利太郎は、父・松太郎から伝統的な刺繍技術を学び、庭で育てた草花など、身の回りで観察した植物をモチーフとした、オリジナルのデザインによる瀟洒な刺繍作品を、さまざまな公募展において発表しました。

利太郎が最も長く関わった団体が、日展です。日展は、1907(明治40)年に文部省美術展覧会(文展)として始まり、途中、帝国美術院展覧会(帝展)、新文展などと改称を繰り返した国主導の「官展」の流れを引き継ぎ、戦後再編成された美術工芸団体です。1958(昭和33)年には民間団体へと移行しました。利太郎は、1929(昭和4)年、第10回帝展に初入選したことをきっかけに、同展への出品を続け、戦後、1946(昭和21)年の第1回日展では特選を受賞しています。

文展・帝展には当初工芸部門がありませんでしたが、1927(昭和2)年にこれが新設され、工芸家たちにも同展への参加の道が開かれた中、利太郎は初期からの数少ない刺繍分野の入選者の一人として、長

きにわたり、美術工芸界において高い評価を得続けていた人物だと言えるでしょう。

本展では、ご遺族や関係者、作品を所蔵している町田市立博物館のご協力により、近年は公に展示される機会のほぼなかったこの稀有な作家の緻密かつ挑戦的な仕事に、再び光を当てています。戦前の作例は残念ながらご紹介できませんでした。1940年代後半～70年代の展覧会出品作5点、そして、父・松太郎が昭和初期に制作した《かたつむり》(個人蔵)を併せて展示しています。

《サボテン》(1955年、町田市立博物館蔵)などに見るさまざまな糸の「撚り」を使い分けた精緻な技術は、江戸の刺繍の伝統を継承した利太郎ならではのものであるとともに、《ピーマン》(1947年、個人蔵)、《百日草》(1970年、個人蔵)には、「刺繍」にとどまらず、自らの思い描く表現を追求し、布のほか、螺鈿や皮革など新たな材料を用いたアップリケ技法の習得にもまい進したその静かな情熱が結晶しています。ぜひ本展で、利太郎の刺繍の魅力を再発見していただけたらと思います。

(東京都美術館 学芸員 大内 曜)

Ueno Artist Project 2025 "Embroidery—Expression of Life from the Rhythm of a Needle" will be held in Galleries A and C from November 18 (Tuesday). The exhibition features five artists who ply a needle to stitch thread in cloth and other materials. In this article, we look at HIRANO Toshitaro, an embroiderer active in the Taisho (1912-26) – Showa (1926-89) periods. Born in 1904 to a family of embroiderers practicing their craft since early-modern times, Toshitaro learned traditional embroidery techniques from his father, Matsutarō. Exhibiting precisely rendered works featuring motifs of familiar plants in

innovative designs, he won high acclaim. The elaborate technique of using strands of twisted thread seen in Cactus (1955, Machida City Museum) was unique to Toshitaro, who inherited the Edo tradition. Toshitaro was also passionate about mastering new expression and techniques, and sometimes transcended the territory of "embroidery" to incorporate materials such as mother-of-pearl and leather in his works. We hope this exhibition enables you to rediscover their charm.

(OUCHI Hikaru, Curator)

美術情報室は、図書・図録・雑誌などを閲覧できるライブラリー。
アーカイブズでは、館の歩みに関する資料を収集・整理・保存・公開しています。

A library open for perusal of reference books, catalogues, and magazines.
The Archives collect, preserve, and display materials documenting the museum's progress.

美術情報室からおすすめ図書のご紹介です

Library and Archives Recommended Book

「ルーヴル美術館 ブランディングの百年」

藤原貞朗 著／講談社 刊／2024年

Musée du Louvre: A Century of Branding
FUJIHARA Sadao (author) / KODANSHA Ltd. (publisher) / 2024



《モナ・リザ》をはじめ、誰もが知る傑作の
数々を擁するルーヴル美術館は、いかにして今
日の地位を確立したのでしょうか。フランス近代

美術を専門とする著者によれば、「偉大なるルー
ヴル」像の形成は、美術館や行政、そして政治
家によって進められた文化的政策、つまり「ブラ
ンド化政策」の積み重ねの結果によるものだと
述べています。本書では、当時の展示室のイメ
ージを駆使して《サモトラケ島のニケ》《ミロのヴ
ィナス》、印象派の作品、そして《モナ・リザ》が
展示された場所の変遷をたどります。それはコレ
クションの解体と再編の歴史であり、フランス美
術史編さんの過程であり、美術館が政治的パフ
ォーマンスの舞台と化していく道のりでもありま
す。さらに、ルーヴル・アブダビの開館や、日本で
繰り返し開催される「ルーヴル美術館展」など、
世界に進出する「ルーヴル帝国」の戦略にも焦
点を当てます。巨大ブランド化していく美術館の
思惑を明らかにし、古典だけでなく現代アートや
ファッションをも巻き込むルーヴルの「魔力」を
解体する一冊です。

(東京都美術館 学芸員 山田桂子)

How did the Louvre, a museum with so many well-known
masterpieces, including the *Mona Lisa*, attain the status it
enjoys today? According to the author, a specialist in modern
French art, the "Grand Louvre" image enjoyed by the museum
was formed as a result of cumulative cultural policies—which
is to say, "branding policies"—promoted by the museum, the
government, and politicians. This book effectively uses images
of exhibition galleries in those times to trace how the manner
and display locations of the *Winged Victory of Samothrace*, the
Venus de Milo, Impressionist works, and the *Mona Lisa* have

changed through the years. The book thus becomes a history of
the collection's restructuring, the process of compiling French art
history, and museums' role as a stage for political performances.
The book additionally focuses on the Louvre's strategy of
expanding its empire, such as by opening the Louvre Abu Dhabi
and holding recurring Louvre Museum exhibitions in Japan.
A book that highlights the Louvre's intent to become a giant
brand and deconstructs its "magic," which draws not only from
classic art but contemporary art and fashion as well.
(YAMADA Katsurako, Curator)

◀◀ あの日・あの時 Playback! TOBI ▶▶

※東京都美術館は2026年に開館100周年を迎えます。

2025年は1975年の新館開館から50年の
年にあたります。1926年の開館以来、主に美術
家団体の展覧会場として歩んできた東京都美
術館は、新館開館を機に新たな役割を担うべく
自主事業を開始します。新館開館記念のポス
ターには、「東京都美術館が生まれかわります。」とい
う宣言とともに、事業の新しい柱が「常設展・企
画展＋造形教室＋美術図書室＋各種美術団
体展」として記載されています。新館開館にあた
っては、美術館のあり方についても検討され、
現代美術の作品を常時鑑賞できる常設展示場
の必要性が説かれました。最終的に常設展示
場は実現しませんでした。新館開館にあたり
初めて学芸員が配置され、収蔵作品展や多彩
な企画展が開催されるようになります。ここで形
成された戦後美術を中心としたコレクションは、
1995年の東京都現代美術館の開館にともな
い移管され、現代美術の常設展示場としての

機能は現代美術館に引き継がれました。その礎
として、50年前の1975年は、東京都美術館が
「現代美術館」を志向する美術館としての活動
を明らかにした年でした。(米岡響子)



新館開館記念
ポスター
1975年
Celebrating the New
Museum Building's
opening, poster, 1975

2025 marks 50 years since the Tokyo Metropolitan Art Museum's
New Building opened in 1975. With the New Building's opening,
the Museum established curators for the first time and held
collection exhibitions as well as diverse special exhibitions. The
Museum's collection, formed with a focus on postwar art, was
relocated to the Museum of Contemporary Art Tokyo in 1995.
(YONEOKA Kyoko)

東京都美術館 ニュース No.482

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2025年11月30日
発行 東京都美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)
企画・編集 東京都美術館 広報担当
デザイン 株式会社ファントムグラフィックス
翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ
印刷 望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

*最新情報は公式サイトで
ご確認ください



*バックナンバーは
こちら



東京都美術館
〒110-0007
東京都台東区上野公園8-36
Tel 03-3823-6921
Fax 03-3823-6920

公式サイト
<https://www.tobikan.jp>

X
tobikan_jp tobikan_en

Facebook
TokyoMetropolitanArtMuseum

Instagram
tokyometropolitanartmuseum

YouTube
@tokyometropolitanartmuseum7280

表紙の
作品

アウグスト・ストリンドバリ《ワンダーランド》(部分) 1894年
油彩、厚紙 スウェーデン国立美術館

Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

August Strindberg, *Wonderland* (detail), 1894, cardboard,
Nationalmuseum, Stockholm Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum



佐藤慶太郎について

東京都美術館開館 100周年トピックス

今回は東京府美術館の「生みの親」、佐藤慶太郎についてご紹介します。

100th Anniversary of the Tokyo Metropolitan Art Museum TOPICS About SATO Keitaro
This time we feature SATO Keitaro, father of the Tokyo Metropolitan Art Museum



石炭の神様

佐藤慶太郎（1868-1940）は、明治元年現在の北九州市に生まれました。実家は、決して裕福ではなく、慶太郎も小さいときから身体が弱く、苦勞したそうです。現在の福岡県立高校^修、修館^修で英語を学び、必死に勉強を重ねて上京し、明治法律学校（現在の明治大学）を卒業しました。しかし、健康面での不安から結局九州に戻ることとなり、25歳で若松の石炭商の娘と結婚し、実業の道へと進むことになりました。石炭業のノウハウは妻から学び、いつも相談しながら、持ち前の真面目さと勤勉さで鉱物学、経済学、流通、金融、そして商売のイロハを着実に身に付けていきました。誠実、正直を貫いて働き、実業の研究と改良を重ねていくうちに、人々の厚い信用を広く得るまでになりました。そして誰よりも石炭に詳しくなり、妻の助けもあって資産と人脈を着々と拡大していきました。そ

して、ついに「石炭の神様」と言われるまでになったのです。

日本のカーネギー

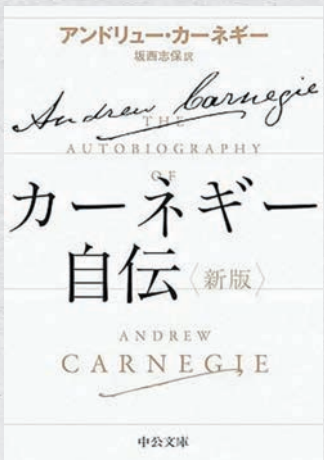
彼は、アメリカの実業家アンドリュー・カーネギー（1835-1919）を信奉していました。カーネギーの伝記をよみ、彼がその収入の大半を慈善事業に捧げていたことを知って、生涯消えぬ感動を受けたそうです。カーネギーは、引退後、莫大な資産を、図書館、大学、音楽ホールなど、芸術文化や教育への寄附などに使いました。慶太郎は、

自分も財産は社会や次の世代の育成のために使いたいと、早い時期から心に決めて、「日本のカーネギー」を目指していました。その一方で、慶太郎自身の暮らしぶりは、衣食住いずれも、ごく質素なものだったといえます。

東京府美術館の「生みの親」

50歳を過ぎた佐藤は、財産と事業資金を蓄えていましたが、若いころから苦しんでいた胃腸病は改善しておらず、主治医のすすめもあって、引退を決意していました。1921（大正10）年

54歳のとき、たまたま上京していた折に新聞の社説に、「大都市東京に常設美術館が一つもないことは遺憾である」との主張を読んで、100万円（現在の約40億円に相当）の寄附を決意します。次世代の社会のためにこそ、お金は使うべきだという年来の信念を実行したのです。これが東京府美術館建設の基礎となって、1926（大正15）年5月、画家、彫刻家、工芸家たち念願の東京府美術館が誕生することになったのです。（山村仁志）



カーネギー自伝 新版

アンドリュー・カーネギー 著／坂西志保 訳
中央公論新社

The Autobiography of Andrew Carnegie
Andrew Carnegie (author) /
SAKANISHI Shiho (translator)
CHUOKORON-SHINSHA, INC. (publisher)

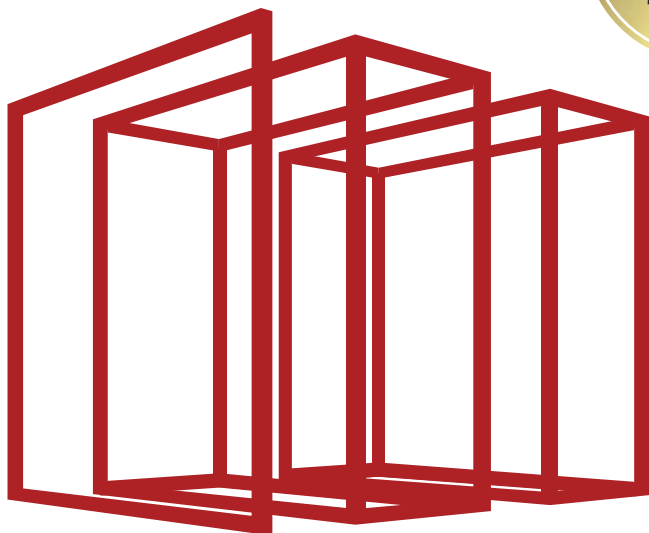
SATO Keitaro (1868-1940) was born in what is today, Kitakyushu City, Fukuoka Prefecture. At the age of 25, he married a Wakamatsu coal merchant's daughter and chose a career in business. With natural seriousness and diligence, he mastered the basics of not only business but mineralogy, economics, distribution, and finance. Working seriously and honestly, committed to researching and improving his business, he came to know coal better than anyone, and in time, people began calling him "the King of Coal." He was an admirer of American businessman Andrew Carnegie (1835-1919). He learned that Carnegie had dedicated his property to charity, a fact that moved and motivated him throughout his life. After turning 50, Sato listened to his doctor's advice and began thinking of retiring from business. In 1921, on reading a newspaper editorial asserting that "It is deplorable that the Tokyo metropolis has no permanent art museum," he decided to donate one million yen (about four billion yen today). His donation became the basis for constructing the Tokyo Prefectural Museum of Art, and in May 1926, the institution that painters, sculptors, and craftsmen had longed for was born. (YAMAMURA Hitoshi)

東京都美術館 ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

東京都美術館開館

100周年
記念号



100th Anniversary 1926-2026



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 482

※東京都美術館は2026年に開館100周年を迎えます